



「あいさつ」を考える…

「あいさつ」

愛知県乙川東小学校 福島圭一郎くん 作

「おはよう」というと目が覚める

「いただきます」というとおなかのすく

「いってきます」というと元気にいける

「ありがとう」というと気持ちがいい

「ごめんなさい」というとほっとする

「おやすみなさい」というといい夢みられる

あいさつってうれしいな

かつて勤めていた学校の「学校評価アンケート」の「あいさつができるか」という項目で、おもしろい結果が出ました。

子ども…8割くらいができる
保護者…6割くらいができる
教職員…4割くらいができる

この違いは何なのでしょう。あいさつの「定義」や「対象」などのとらえ方の違いがあるようです。

子どもたちの判定基準は、学校で先生方にあいさつできれば「できた」となります。保護者は、家でのあいさつができなければ「できた」にはなりません。教職員のとらえは、学校の先生に限らず、家族、地域の方々、学校に来るお客様など、すべての人が対象となっていますので、それらのすべてができなければ、「できた」という評価はしません。また、声の大きさなども評価の対象とするという場合もあります。ですから、「ここまでできて、あいさつ

ができる」ということなんだ、というのを子どもたちに示すことが必要となります。

あいさつは何のためにするのか？

あいさつによって得られるもの。それを「あいさつ」の詩で、作者の福島圭一郎くんは示しているのではないのでしょうか。（「あいさつ」の詩は、校長室暗唱チャレンジの低学年の課題です。）

あいさつについて、「考えさせる」「教える」「気づかせる」「慣れさせる」「習慣化させる」など、様々な手立てを考えていくと、学校だけでできるものではないことにも気づきます。まさに、学校・家庭・地域の三者の取り組みが大事ですね。そうして内面から「あいさつしよう」という気持ちを育てることができれば最高です。

校長室は、暗唱にチャレンジする熱気でいっぱい！



左は、校長室で暗唱にチャレンジする子どもたちの様子です。課題を与えられて、すぐに「やってみよう！」と前向きに取り組む磐梯一小の子どもたちは、本当に素敵だなと思います。

暗唱に成功した子どもたちの表情には、達成感、充実感、満足感が溢れていました！

一方、惜しくも成功できなかった子どもたちの顔には悔しさが滲んでいました。その悔しさが、子どもたちを、さらにたくましく成長させてくれるはずです。